

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

情報交差点 第22回：

モノ資料が持つ情報とは？どう処理し、どう利用する（森田歌子氏によるインタビュー）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 泰則, 森田, 歌子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4791

情報交差点

第 22 回

モノ資料が持つ情報とは?  どう処理し, どう利用する人間の行動をコード化することでモノに文化的要素をつける
国立民族学博物館文化資源研究センター山本泰則准教授の研究本誌編集アドバイザー  森田歌子

最近、巨大な検索エンジンや様々なデータベースとも言える情報検索サイトが公開されている。先端科学からごく日常的なモノの情報まで実に様々である。そういったサイトを見ていて気付いたことがある。先端科学の成果であれ日常のモノであれ、その情報に辿り着くには、手掛かりは言葉、言い換えればモノに付けられた記述しかないのであろうかということである。モノからイメージするキーワードで検索しても、なかなか探し出せない。特にモノを使う、あるいはモノを作るという人間の行動を条件として探したい時はさらに困難である。イメージしたキーワードと作成者が付けた記述が合っていないのであろう。ではどうやってその付与された記述を探し出せばいいのであろうか。その疑問を解きたく国立民族学博物館文化資源研究センター山本准教授を訪問した。

山本  泰則  氏

文化資源には社会的運用可能な資源が含まれる

山本先生は、大阪大学大学院基礎工学研究科博士後期課程に在籍の後、1983年より国立民族学博物館（以下、民博）で研究に従事しておられる。専門分野は博物館情報学で、文化資源情報の生成と共有に関する研究を主に、長くモノの情報処理を研究しておられる。本誌vol. 51 (2008) no. 4 p. 282-283でご紹介した人間文化機構の「研究資源共有化システム」の構築にも関わっておられる。

文化資源研究センターでは、人間文化についての理解を深め、文化資源の研究者による共同利用や、広く社会の人びとによる利用が可能となるように、その体系的な管理と情報化、共同利用や社会還元に向けて基礎研究や開発研究が行われている。文化資源には様々な有形のモノや情報、身体化された知識・技法・ノウハウ、制度化された人的・組織的ネットワークや知的財産など、社会的運用に向けて開発可能な資源が広く含まれているとのこと。

モノ資料のデータベース化研究の発端

民博には、実に26万以上のモノ資料があり、それらのモノ資料のデータベース化を研究している。当時のデータベースは道路に似ていた、研究者にとっては家の隣にいい道路があっても関係がない、その研究者の考えを、多種多様なモノを見つける手掛かりとして何とかまとめられないかと思ったのが研究の発端だということであった。

「研究資源共有化システム」の構築の際は共通データとしてのダブリン・コアのメタデータでは表現できない、例えば古文書が持つモノとしての情報、紙のシミや皺も重要な情報であると考えたとのお話を伺った。

「雪は天からの手紙である」中谷博士の言葉

そこでモノに付けた記述情報とモノそのものが持つ情報はどう違うのかと質問した。

開口一番、「雪は天からの手紙である」という、中谷宇吉郎理学博士の言葉が出た。この言葉は、



1938年に最初の岩波新書（現在は岩波文庫）の一冊として出版され、現在まで長く読み継がれている『雪』のなかに書かれている。

中谷宇吉郎博士は北海道帝国大学理学部教授となった1932年ころから雪の結晶の研究を始め、1936年に世界で初めて人工雪の製作に成功された方である。

もし、天から降ってきた六角形の雪の結晶のデータベースを作るとしたら、その様々な形、結晶を確認した場所等の記述がメタデータなのであろうが、さらに上空の状況で様々な形になった雪の結晶は、大気の状態という自然情報も内包していることになるので、雪の結晶というモノ自体が持つ多くの情報が科学の世界、研究の世界に繋がっていく、というお話をお聞きし、「モノが持つ情報」に対するこれまで持っていたイメージが大きく広がった。

モノの文化的文脈情報とモノ自体の情報の記述

山本先生はさらに、モノ資料のメタデータとは、モノがあった文化的文脈に関する情報、モノそのものが持つ情報の記述である、文化的文脈にはそこに人の解釈が入り、モノの情報には記述が必要であり、今はモノについての記述を検索していると話された。

モノの情報の記述に関する研究としては、20年ほど前にIBMとの共同研究で、写真の色をパラメータ化してみたとのこと。また形の情報を表す用語集、シソーラス構築の試みをされていたと聞き、モノ情報の記述のために考えられたシソーラスについて伺った。

民博では1978年にコンピュータが導入され、当初より情報検索に用いるシソーラスの開発がひとつの大きな課題であると考えられていたそうである。このシソーラス開発の段階で、HRAF（フラーフ；Human Relations Area Files）の二つのコード体系が検討されたとのこと。このコード体系とは、地域・民族別に分類するOWC（Outline of World Cultures）と人間の様々な行動、社会生活、習慣、物の生産等

の文化的要素を、総合的に分類するOCM（Outline of Cultural Materials）である。

HRAFの二つのコード体系が持つ新たな可能性

HRAFを運営・提供しているHuman Relations Area Files, Incの本部は、イェール大学のキャンパス内にあり、HRAFのプログラムに参加している研究機関は、24か国250機関以上にも及んでいる。

民博は1976年にHRAFの正会員として加盟し、今も、モノ資料情報にこの二つのコードが日本語化され付与されている。1988年3月、梅棹忠夫館長の時に、HRAFの許諾を得て翻訳され発行されていると伺い、実物を見せていただいた。

英語版は現在もオンラインデータベース「eHRAF world cultures」として継続されており、新しい分類が逐次、追加されているが、日本語版は1988年版のみだということであった。

OCMの日本語版「文化項目分類」の項目には00から88までの大分類とその下に各10個程度の分類項目がある。その項目には人文学的なものだけでなく、人間生物学、行動の過程とパーソナリティ、コミュニケーション、記録、家畜飼養、農業、食物加工、食物消費、原材料の加工、建造および建設、エネルギーと動力、科学工業、資本財の産業、機械類、マーケティング、財務、商工業組織、陸上輸送、水上・航空輸送、社会問題、健康と福祉、病気、数と測定、知識などもあった。

OCMの日本語版「文化項目分類」と1990年に民博シソーラス委員会が作成したOWC日本語版「地域・民族分類」を見て、この項目と科学技術関連の用語を組み合わせれば、人が使うモノ、人が作るモノの情報検索のキーとなるようなシソーラスのようなものができるのではと、情報検索のための用語に関心を持つ私としては、新たな興味を持った。是非、この二つの日本語版が改版されるとともに公開していただきたいと思った。